

(2) 絶滅危惧種

(パフロ)

特定の生物種が絶滅危惧種となってしまう原因としては、生息地の減少などの生息環境の悪化、自然や生態系のバランスの乱れなどが考えられます。市内では、山地から丘陵の里地里山のエリアにおいて、絶滅危惧種が多く確認されています。特に里地里山については、市街地と山地のバッファゾーン（緩衝地帯）として、希少な生物にとって非常に重要なエリアになっていますが、東京都内全域において、生態系の劣化や面積の減少が進んでいます。このことから市内に残っている里地里山は、トウキョウサンショウウオ、ホトケドジョウ、ゲンジボタルなどの希少種が棲める重要な地域となっており、これらの生態系を維持するために、今後も環境の変化に注目し、多様な自然環境を保全していく森づくりが必要です。

森林レンジャーあきる野が確認した絶滅危惧種の数、動物で、哺乳類3種類、鳥類32種類、爬虫類4種類、両生類5種類、魚類4種類、昆虫8種類の合計56種類です（東京都の2010年レッドリストにより）。特に、鳥類と両生類の割合が多いことから、この2分類群の保全に向けた取組の強化が必要です。そのため、当報告書の145ページにある「希少種の特別調査」に含まれている希少種以外に、ハヤブサ、サンコウチョウ、ヤマセミ、アカショウビン、ミゾゴイなどの鳥類や、アカハライモリ、ニホンアカガエルやツチガエルなどの両生類の生息地や繁殖場所も確認しています。

これら絶滅危惧種以外にも、ツツドリ、オオルリ、コルリ、ゴジュウカラ、ミサゴ、ヒダサンショウウオ、シュレーゲルアオガエル、ゲンジボタル、オオムラサキなど、多くの希少種も市内で確認されています。これらの種類の動向、個体数の変動又は生息環境などの調査や保護対策が必要です。



オオムラサキ（準絶滅危惧種）



ヤツメカミキリ（準絶滅危惧種）

＜市内で確認された絶滅危惧種（準絶滅危惧種を除く）の一覧＞

項目	種類（絶滅危惧種）	ランク
哺乳類	ツキノワグマ (<i>Ursus thibetanus</i>)	EN
	ニホンカモシカ (<i>Capricornis crispus</i>)	VU
	カヤネズミ (<i>Micromys minutus</i>)	VU
鳥類	ハチクマ (<i>Pernis ptilorhyncus</i>)	CR
	オオタカ (<i>Accipiter gentilis</i>)	VU
	ツミ (<i>Accipiter gularis</i>)	VU
	ハイタカ (<i>Accipiter nisus</i>)	VU
	ノスリ (<i>Buteo buteo</i>)	VU
	サシバ (<i>Butastur indicus</i>)	CR/VU
	クマタカ (<i>Spizaetus nipalensis</i>)	CR/EN
	ハヤブサ (<i>Falco peregrinus</i>)	CR/VU
	ヨタカ (<i>Caprimulgus indicus</i>)	EN/VU
	チョウゲンボウ (<i>Falco tinnunculus</i>)	VU
	ヤマドリ (<i>Syrnaticus soemmerringii</i>)	VU
	コノハズク (<i>Otus scops</i>)	EN
	フクロウ (<i>Strix uralensis</i>)	VU
	ヤマセミ (<i>Ceryle lugubris</i>)	VU
	アカショウビン (<i>Halcyon coromanda</i>)	CR
	オオアカゲラ (<i>Dendrocopos leucotos</i>)	VU
	コマドリ (<i>Erithacus akahige</i>)	VU
	トラツグミ (<i>Zoothera dauma</i>)	VU
	センダイムシクイ (<i>Phylloscopus coronatus</i>)	VU
	エゾムシクイ (<i>Phylloscopus borealoides</i>)	VU
	サメビタキ (<i>Muscicapa sibirica</i>)	VU
	コサメビタキ (<i>Muscicapa dauurica</i>)	EN
	サンコウチョウ (<i>Terpsiphone atrocaudata</i>)	VU
	ミソゴイ (<i>Gorsachius goisagi</i>)	VU/EN
	ササゴイ (<i>Butorides striatus</i>)	VU
	バン (<i>Gallinula chloropus</i>)	VU
	オオバン (<i>Fulica atra</i>)	VU
	イソシギ (<i>Actitis hypoleucos</i>)	VU
	ヤマシギ (<i>Scolopax rusticola</i>)	VU
	コチドリ (<i>Charadrius dubius</i>)	VU
	イカルチドリ (<i>Charadrius placidus</i>)	VU

爬虫類	ニホンイシガメ (<i>Mauremys japonica</i>)	CR
	ニホンスッポン (<i>Pelodiscus sinensis japonicus</i>)	CR+EN
	ヤマカガシ (<i>Rhabdophis tigrinus tigrinus</i>)	VU
	ニホンマムシ (<i>Gloydius blomhoffii</i>)	EN
魚類	ホトケドジョウ (<i>Lefua echigonia</i>)	VU/EN
	アブラハヤ (<i>Phoxinus lagowskii steindachneri</i>)	CR
	カジカ (<i>Cottus pollux</i>)	VU
両生類	トウキョウサンショウウオ (<i>Hynobius tokyoensis</i>)	EN/VU
	アカハライモリ (<i>Cynops pyrrhogaster</i>)	EN
	トウキョウダルマガエル (<i>Rana porosa porosa</i>)	VU
	ニホンアカガエル (<i>Rana japonica</i>)	VU
	ツチガエル (<i>Rana rugosa</i>)	VU
昆虫	アオハダトンボ (<i>Calopteryx japonica</i>)	VU(EN)
	コサナエ (<i>Trigomphus melampus</i>)	EN(CR)
	マイコアカネ (<i>Sympetrum kunckelii</i>)	VU
	ヒメアカネ (<i>Sympetrum parvulum</i>)	VU
	キイトトンボ (<i>Ceriatagrion melanurum</i>)	EN
	クルマバッタ (<i>Gastrimargus marmoratus</i>)	CR
	ハルゼミ (<i>Terpnosia vacua</i>)	EN
	クロタマムシ (<i>Buprestis haemorrhoidalis japonensis</i>)	(VU)

(備考) 黒字は東京都ランク。赤字は環境省ランク。()は本土ランク。

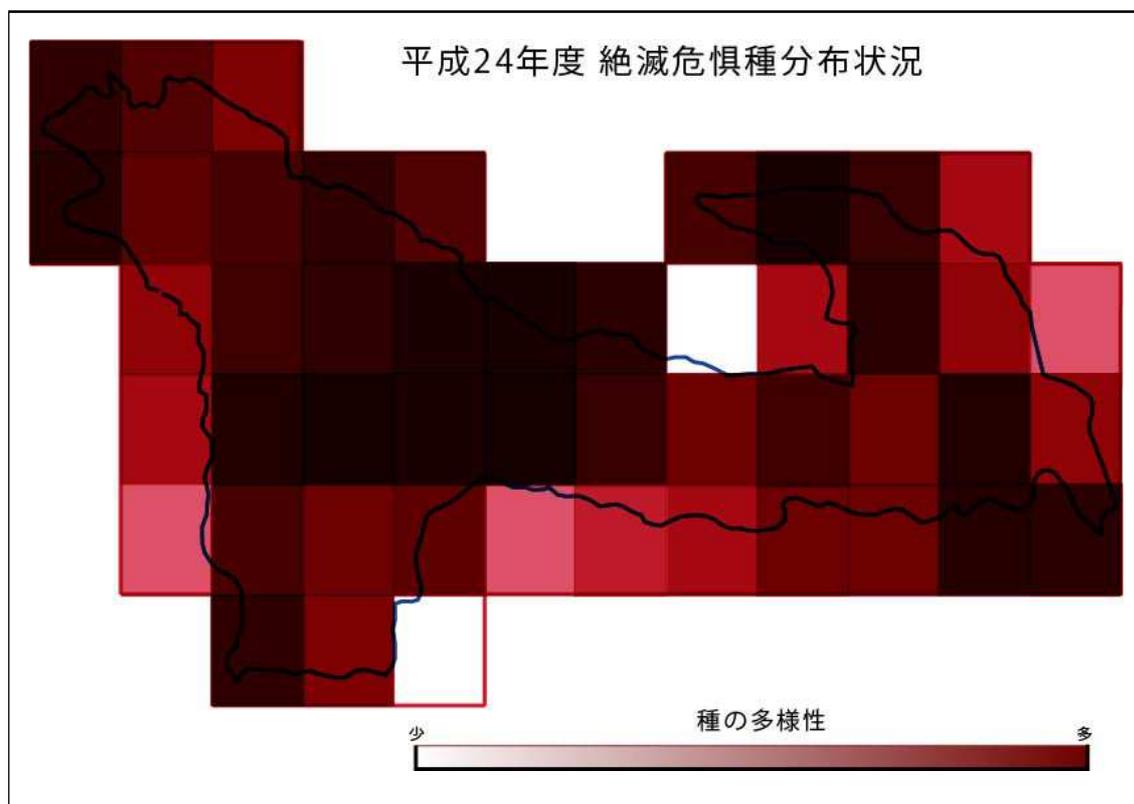
※ 参 考

カテゴリー名称	表 示	基 本 理 念
絶滅危惧Ⅰ類	CR+EN	現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存在が困難なもの
	CR	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
	EN	ⅠAほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類	VU	現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの

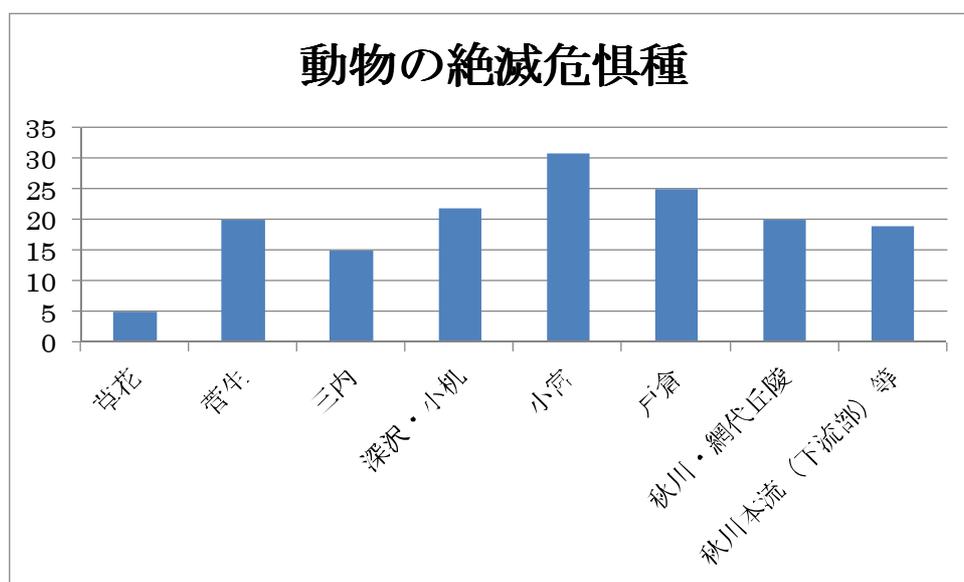
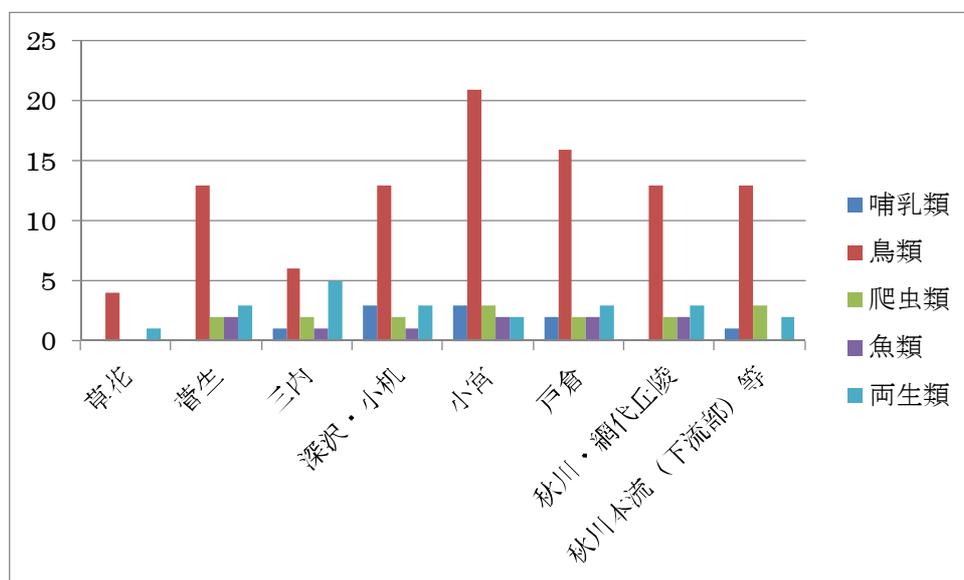
<地区別で絶滅危惧種（種類数）>

地区	哺乳類	鳥類	爬虫類	魚類	両生類	全種類
草花	0	4	0	0	1	5
菅生	0	13	2	2	3	20
三内	1	6	2	1	5	15
深沢・小机	3	13	2	1	3	22
小宮	3	21	3	2	2	31
戸倉	2	15	2	2	2	23
秋川・網代丘陵	0	12	2	2	3	19
秋川本流（下流部）等	1	13	3	0	2	19
あきる野全域	3	32	4	4	5	48

確認された絶滅危惧種の市内における大まかな分布状況について、次のメッシュマップで示します。



グループ別及び地区別で絶滅危惧種の数



絶滅危惧種の分布状況について、大部分は多様な自然環境が残っているエリアに分布しているので、これらの種に注目し、大まかな分布状況についてメッシュマップで示しました。

里地里山のエリアなどでは、外来種が多く生息している場所と重なるので、これらの影響により今後の生息状況の変化について注意する必要があります。また、外来種対策の強化や希少種の重要な生息場所の保全を推進する活動が必要とされています。

〈絶滅危惧種の写真〉



コサナエ



クルマバッタ



クロタマムシ



トウキョウサンショウウオ



アカハライモリ



ニホンアカガエル



トウキョウダルマガエル



ニホンマムシ



ホトケドジョウ



ハチクマ



オオタカ



ハイタカ



クマタカ



チョウゲンボウ



ハヤブサ



ヤマドリ



トラツグミ



コサメビタキ



サンコウチョウ



ササゴイ



ミゾゴイ



ヤマシギ



イカルチドリ



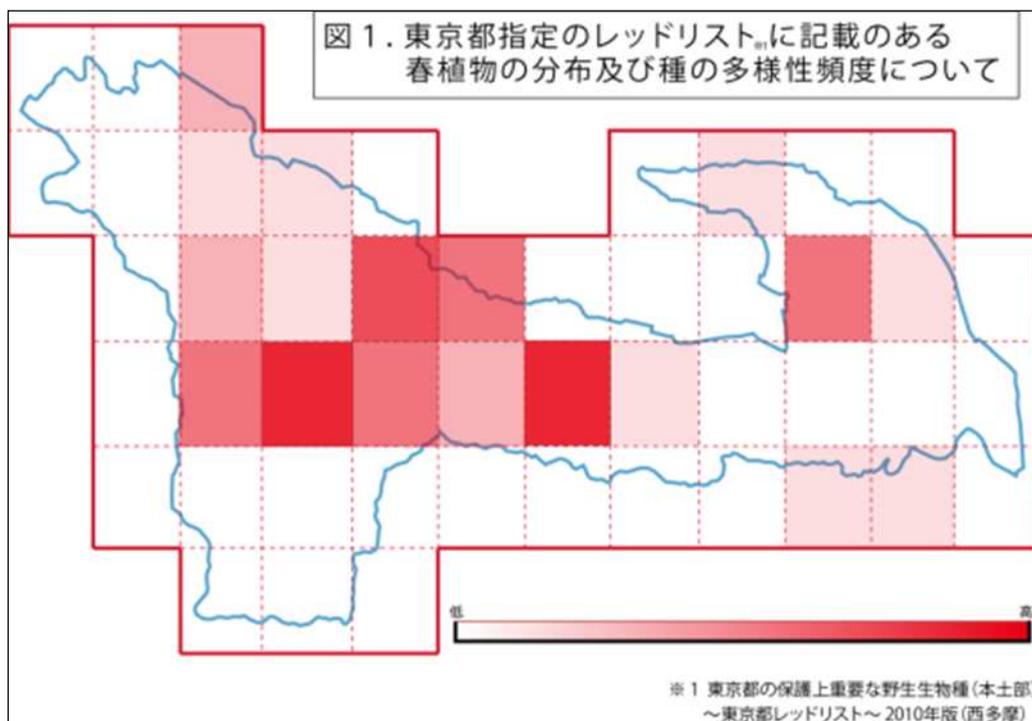
ニホンカモシカ

(3) 春植物調査

(佐々木)

春植物（スプリング・エフェメラル）とは、早春、他の植物が葉を展開する前に一斉に花を咲かせるケシ科、キンポウゲ科、ユリ科の多年草の総称で、その多くが東京都のレッドリストに掲載されています。一般的に、春植物の生育箇所条件として①落葉広葉樹の林床に分布②北側斜面に分布というこの2つの条件が必須であると言われていています。平成23年度より市内の登山ルート等の巡視の際に各地の林床を確認してきた限りでは、条件①の落葉広葉樹は、人の生活圏に近い薪炭林（主にコナラ林）やクリ林、ウメ林等がこれに該当し、場所によっては放置され荒れた状況となっています。特にアオキなどの常緑樹が低木として繁茂している林では、早春、林床に光が届かず春植物には適さない生育環境となってきたと推測されます。また、条件②である北側斜面については、元来、日が差さず住宅等の候補地としては敬遠されていましたが、高度成長期の宅地建設や近年の小規模開発等で徐々に春植物の生育適地が消失しつつあります。これらのことから、現在のおきる野市の春植物の分布状況を把握するため、平成25年3月より市内の北側斜面の林縁部を重点的に調査しました。調査としては、目視で種同定し生育地点を記録し、また、開花株数や生育地の周辺環境等も合わせて調査しました。

調査結果は下記メッシュで示したとおり、東京都のレッドリストに掲載されている種の多様性が判断できるよう濃淡で示しています。種の多様性が高い地域ほど濃いメッシュで示しており、一番濃いメッシュにはレッドリスト掲載種



が5種分布し、逆に一番淡いメッシュは1種のみ分布となっています。今回の調査からは、種の多様性の高い生育環境は旧五日市町方面に多く存在することがわかり、旧秋川市方面では種の多様性が低いことが見て取れます。ただしこれは、旧秋川市方面の春植物の生育環境が植物を保護している個人宅の庭や植物の保全地域であったりするため、双眼鏡などでの確認による調査にとどまり、詳細な調査を実施できなかったことが影響している可能性があります。

しかしながら、春植物の生育環境は旧五日市町方面と旧秋川市方面では大きな違いがあり、明らかに旧五日市町方面で多くの生育地が確認されています。しかも、各生育地で多数の開花株を確認しており、生育に適した自然環境が現存していることが判明しました。

また、春植物の2つの生育条件（①落葉広葉樹の林床に分布②北側斜面に分布）をあきる野市の生育環境と比較してみたところ、生息地によっては多少の条件の違いがみられました。①落葉広葉樹の林床に分布するという条件については、生育箇所の半数以上はクリ、ウメ、ケヤキなどの落葉広葉樹でした。ただし、針葉樹の林縁部で春植物を多数確認したことから、針葉樹の林縁部もまた、春植物の重要な生育地となっているようです。②北側斜面に分布するという条件については、概ね該当しており、秋川（養沢川、三内川）と平井川（鯉川）の浸食によって形成された北側斜面が春植物の生息地として適しているようです。

今回の調査で春植物の生育地の多くが森と人の生活域との境界域（バッファゾーン）に該当していることが判明しました。この傾向は旧五日市町方面に多くみられ、例えば、林縁部が畑地やクリ林、ウメ林という環境や山里の長い間土地が改変されていない墓地といったものが森と人里との境界域に当たります。この境界域に春植物にとって適した生育箇所が多く確認されましたが、草刈り等の人の管理が滞ってしまうと春植物の生育に適さない環境へと数年で変移してしまっています。実際、多くの林縁部は笹やつる性植物が繁茂しており森と人里との境界域が不明瞭になってきているのが現状です。このような環境では当然春植物の生育地としては適していません。しかし、一度放置された土地であっても草刈り等の管理を行い、早春地面に光が届く環境を復活させることで春植物の生育環境の復元につながる可能性があります。これは郷土の恵みの森づくり事業の景観整備地にて確認された事例ですが、放置され繁茂したシノダケの藪だった箇所において、伐採整備された翌年の早春、以前確認できなかった春植物の開花を確認することができました。これらの事から、森と人里との境界には人と自然が時間をかけて形成してきた環境があり、その土地が適切に管理されることが、数を減らしている春植物の最適な生育地の保全につながるかと推測されます。